

## ねぎ

### ○長ねぎ栽培について

現在、気温が高めで推移しており、併せて湿度も高いため軟腐病や白絹病が発生しやすくなっております。例年だと8月下旬から9月上旬にかけて残暑（猛暑）がありますので早期防除に努めましょう!!

#### 〈軟腐病〉

夏季の高温で多発。例年発生が見られる圃場では特に被害が心配される。白絹病やネギアザミウマの傷口から軟腐病が感染する場合もあるので注意。

夏ねぎ：収穫間際であれば、スターナ水和（収-7日）、ヨネポン水和（収-7日）、Zボルドー（収-）など

秋冬ねぎ：オリゼメート粒剤（収-30日）、スターナ水和、ヨネポン水和、Zボルドーなど

#### 〈白絹病〉

地際の茎の周辺にクモの糸状の菌糸あり。茶褐色のツブツブ状が菌核。25~30℃の高温、湿度が高い状態が続くと発生しやすい。土寄せ後に株元散布。

モンカット粒（収-30日）、モンガリット粒（収-14日）、ロブラール水和（灌注、収-14日）など

## 山うど

### ○山うど栽培について

8月下旬以降は台風対策を万全に!

- ① 高温多湿状態で株が枯れ上がります。  
速やかに地表排水が行われるよう、明渠を掘るなどし、排水路の点検を行ってください。この時期に湿害にあった圃場の株は、伏せ込み後、腐りやすくなり、揃いが悪くなるので排水対策はしっかり行って下さい。
- ② 強風による倒伏が考えられます。  
摘心をまだ実施していない圃場のうち、茎長が1mを

大きく超え、倒伏が心配される場合は摘心を実施してください。ただし、摘心が遅れると2次生長するおそれがあるため、8月下旬までには摘心して下さい。

倒伏すると、茎の刈り取り作業がしづらくなったり、新芽が動いたり、伏せ込み時に手間がかかります。

- ③ 株が倒伏した場合は、引き起こしを行わないでください。

株の引き起こしにより再度株が動くと、新芽がさらに動いてしまいますので、注意してください。

※8月下旬以降の湿害、強風被害は収量に大きく影響します。万全な対策をお願いします。

## みょうが

### ○みょうが栽培について

#### 〈根茎腐敗病防除について〉

まだ収穫していない場合は、収穫3日前までに使用できるランマンフロアブル500倍又は、オラクル顆粒水和剤2,000倍を3 $\frac{1}{2}$ ℓ/m<sup>2</sup> (3,000 $\frac{1}{2}$ ℓ/10a) 使用して下さい。

#### 〈収穫時の注意点について〉

- ・きれいに水洗いした後、水切りをしっかりと行い、柄を2cm以内に切りそろえて、切り口を乾燥させる。
- ・パックで出荷する場合には、1本6g以上のものを太さを揃え、1パック当たり60gで出荷する。
- ・極端に色沢の悪い物、細い物、切り口が変色したものは出荷しない。

## アスパラガス

### ○アスパラガス栽培について

先月まで湿度が高かったため、茎枯病や斑点病の発生が見られます。

茎枯病に対しては、ロブラール水和剤を2,000倍にして

散布してください。また斑点病に対しては、ラリー水和剤を4,000倍にして散布してください。

両方の発生が見られる場合はアフエットフロアブルを2,000倍にして散布してください。合わせてネギアザミウマが出てくるじきになりますので、リーフガード顆粒水和剤やコルト顆粒水和剤の散布も行っていきましょう。

## きゃべつ

### ○きゃべつ栽培について

8月中旬から8月下旬には、S646を10aあたり20kg追肥し、軽く中耕しましょう。生育が悪い場合は、30kg追肥しましょう。外葉が小さいと収量が落ちるので、外葉を大きくするよう追肥は必ずおこないましょう。

8月中旬以降は、定植前に使用したスタークル顆粒水和剤等の効果が薄れてくるので、フェニックス顆粒水和剤により害虫防除をしましょう。また、病気の発生も懸念され

るため、フェニックス顆粒水和剤に混ぜて、バリダシン液剤5も散布しましょう。

9月上旬から9月中旬には、結球始期になるため、NK23号を10aあたり20kgを追肥しましょう。

9月上旬以降には、再度、害虫防除をしましょう。病気に関しては発生を見ながら防除しましょう。このころの薬剤は前日まで使える薬剤を使用しましょう。それ以外の薬剤を散布すると、収穫適期を逃してしまう場合があるので使用時期には特に注意しましょう。

畝間・株間の除草は徹底しましょう。